

移入史初期の『ドン・キホーテ』をめぐって

— Acerca de las primeras traducciones y críticas
del Quijote en el Japón moderno —

蔵本邦夫
Kunio Kuramoto

El objeto principal de este artículo es tratar de aclarar errores y problemas de las primeras traducciones y críticas del Quijote en el Japón moderno. El artículo se divide en tres secciones según los temas a tratar.

1 Adaptación y nacionalidad

El prólogo de “*Oshushinwa Tanimanouguisu*”, publicado en 1887, dice que esta novela es un episodio del Quijote. No es la primera versión japonesa del Quijote, sino una adaptación de “*La fuerza de la sangre*” (una de las “*Novelas Ejemplares*” del mismo autor). Además toma a Cervantes por escritor francés. Es posible que la versión francesa que se usó al traducir al japonés originara ese error sobre la nacionalidad de Cervantes.

2 Palabra japonesa “Kaisha”

Desde los últimos años del periodo Edo hasta la era Meiji, se publicaron muchas críticas del Quijote. Una de las críticas es “*Seiyo hinkoron*” en la traducción de Keiu Nakamura. Al leer la crítica, me extrañé de la palabra japonesa “Kaisha”. Porque no la entiendo muy bien en el contexto. Buscando la equivalente a “Kaisha” en el libro original “*Character*” escrito por Samuel Smiles, “Kaisha” es equivalente al término inglés ‘society’. Desde el año 1877 más o menos, al traducir ‘society’ al japonés, se empezó a usar la palabra japonesa “shakai”

3 Nombre del protagonista —¿Cómo se dice Don Quijote en japonés?

En los primeros años de la recepción del Quijote, Don Quijote no se decía “ドン・キホーテ” en japonés, sino “ドン・キューイコッテ”, “ドンクイッキソート”, “ドン・クイキソート”, “ドンキショット”, “ドンキーショット”, “ドン・コーキゾート”, “どぬきほおて”, etc. Para pronunciar correctamente, hubo una polémica entre Ogai Mori y Bin Ueda. Gracias a esa polémica desaparecieron aquellas pronunciaci3nes incorrectas y esa polémica también ayudó a que se difundiera el nombre “Don Quijote”.

外国文学の移入に際して、語学に長けているからといって、必ずしも優れた紹介や翻訳ができるとは限らない。幕末から明治にかけての移入史初期の『ドン・キホーテ』を例に、そんな紹介や翻訳における陥りがちな間違いや苦勞の跡を辿りながら、Don Quijote という名前が、ドン・キホーテという邦訳名に落ち着くまでを明らかにする。それが本論の目的である。なお旧漢字や仮名遣いは、読みやすさを考え、新漢字や現代仮名遣いに書き換えた箇所がある。

1 翻案・国籍

日本で最初の『ドン・キホーテ』の翻訳は、明治20年(1887)4月に出版された愛花仙史(関)、齋藤良恭(訳)、『欧州新話谷間乃鷲』(東京共隆社、117頁)である。三木愛花(本名:貞一)は序文で「近頃齋藤生一書を携へ来り。曰く。是れ西班牙の小説『ドンキーショット』中に録するものにして。其原書ハ文章の流暢優美を以て。全欧に称され。翻訳して諸邦に伝えれり。其事ハ即ち実伝にして。所謂小説なるものにあらず。然れども。其事絶奇にして。其文章も巧みなるが為に。終に小説社中に伝播流布して。見て一部の小説となすに至れり。今之を訳して。谷間の鷲と云う」(『谷間乃鷲』:1-2)、と翻訳に至った経緯を述べている。『ドン・キホーテ』は、ドン・キホーテとサンチョ・パンサのいくつもの話からなる行状記ではあるが、『谷間乃鷲』に一致する挿話はない。実はこれはセルバンテスが1613年に出版した『模範小説集』所収の作品『血の力』を翻訳したものであって、『ドン・キホーテ』の一挿話を訳したものではなかった。また『谷間乃鷲』は、原文にない挿話も加筆され、話が2倍程度長くなっている。これについても愛花は序文で「素より原書の巧妙に及ばずと雖も。其奇構に至っては。嘗て損せざるなり。儘又蛇足を加ふ。蓋し読者の見て巻の了るを惜しむを恐るゝ為なり」(同:2)と説明している。シェークスピアの『ベニスの商人』が、『何桜彼桜銭世中』(さくらどきぜにのよのなか)や『人肉裁判』、またトルストイの『戦争と平和』が『泣花怨柳北欧決戦余塵』と改題されることを考慮すれば、また西洋に追いつこうと始められた演劇改良運動や改良小説などが唱えられた時代背景を考え合わせれば、当時の翻訳にあっては加筆なども許されたのかもしれない。しかし『谷間乃鷲』では問題視されなかった翻訳も、同じスペインの劇作家であるカルデロン作『サラメアの村長』の翻訳の場合にはそうはいかなかった。これを翻訳したのは森鷗外である。鷗外は演劇改良運動の先駆的な翻訳として、ドイツ留学から帰国した自身の文芸活動の最初に、この劇作を選んで、邦訳名を『音调高洋箏一曲』(しらべはたかしギタルラのひとつし)(明治22年)と題し新聞紙上に連載した。『谷間乃鷲』とほぼ同時期でありながらも、新聞紙上に発表したことで反響が大きかったこともあって、翻訳論争となってしまったのであろう。さて『谷間乃鷲』に何が加筆されたのかに話を戻せば、それは主人公の男性がイタリアへ旅立つことになる理由や、イタリアでの生活の様子を描いた箇所である。しかし主人公の滞在したイタリアはセルバンテスの頃のイタリアではなく、現イタリア建国の時代であった。これは明治における自由民権や国会願望の表れではないかと考える。また電信などの挿話もあるが、時代錯誤に陥らない内容であることが幸いしている。詳細は拙著「日本における偽『ドン・キホーテ』考」(1992年)を参照されたい。

さて翻訳に問題があるだけかと思いきや、実はとんでもない間違いがこの翻訳書にはある。それは翻訳書の表紙を読むと明白である。

NOUVELLES DE CERVANTES

仏国セルバント氏著

理解できないのは、愛花の序文では「西班牙（スペイン）の小説」と説明されているにもかかわらず、なぜこのような表紙になるかということである。また本の奥付以降にある宣伝広告を見ても「仏国セルバント氏著」と印刷されている。三木愛花や翻訳者である斎藤が表紙の校閲をしなかったのか、出版社の勝手な判断で行ったのか、また校閲者の思い違いがあったのか、あるいはフランス語の表題から仏訳書を用いたことは明白であるから、そこに間違いが起因するのか。それならばその仏訳書を探せばいささかの理由も見つかるかもしれないが、いずれにせよ推測の域は出ない。Riusの資料（Rius：332）を見ると、フランスでの『ドン・キホーテ』の翻訳は1614年、『模範小説集』の翻訳は1615年に始まっている。そしてタイトルに『ドン・キホーテ』の著者であることが明確に書かれている仏訳書を探すとすれば、1705年出版の『模範小説集』の翻訳（7編）がある。

NOUVELLES De MICHEL De CERVANTES Auteur del'Histoire DE DON QUICHOTTE. Traduction nouvelle. Enrichie de Figures en taille-douce. A Amsterdam, Chez Marc Antoine. M. D. CCV.

Riusの解説によれば、この仏訳書は「不正確でやや簡略化して端折ったところがある」（Rius：332）と説明されている。これは1709年に残りの小説も翻訳収載され、増補改訂された。仏訳書のタイトルから小説「ドンキーショット」中に録する挿話と思い違いをしたのだろうか。邦訳書のタイトルに一致するには仏語題を短くしなくてはならない。念のために付言しておく、青田は早稲田大学図書館蔵の上記の1723年版（青田：150）を挙げているが、これが早稲田大学図書館に納入されたのは、1997年である。この版を含め1700年代には「Auteur del'Histoire DE DON QUICHOTTE」をタイトルに持つ仏訳書が他にもあり、いずれもいくつもの版を重ねるものの、邦訳が行われた1800年代には、他の翻訳者もいるが、出版数から考えて「最良の翻訳であるとされる」（『フランス文学辞典』：496）Louis Viardotの翻訳に取って代わられた感がある。Viardotで、邦題と一致する版を探すと以下のような翻訳がある。

Les Nouvelles de Cervantes, traduites et annotées par Louis Viardot. Nouvelle édition. Paris. Librairie de L. Hachette & C. 1867.

Viardotがセルバンテスの小説を最初に翻訳したのが1838年である。上記の仏訳はその新版となる。Viardotの仏訳を用いたかどうかは別として、Viardotの仏訳を考えると、関連付け

たくなることがある。それは江戸幕府旧蔵書、一般には葵文庫と呼ばれるその中に、Viardotの『ドン・キホーテ』が含まれていることである。幕府は明治維新を迎えるにあたって、その蔵書類を新政府に没収されるのを恐れ、徳川家の静岡県への国替を機に、静岡にそれらの旧蔵書を移し、現在は貴重書として静岡県立中央図書館に所蔵されている。その葵文庫の中に、Viardotのフランス語訳『ドン・キホーテ』がある。これが日本で最初に輸入された『ドン・キホーテ』であろう。

Cervantès Saavedra, Miguel de. *L'ingénieur hidalgo Don Quichotte de la Mancha*. Nouvelle édition traduite et annotée, par Louis Viardot. Librairie de L. Hachette, Paris. 2 v, n.d. 19×12cm (Su)

書き込み：(赤字)：仏No.952 ルイヒヤド、ドンキショット

分類番号：(赤線で抹消)：前編No.1197、後編No.1198

本書は前後編2巻で、表紙は薄い黄色、ペーパーバックの廉価版である。出版年は不明である。詳しくは拙著『幕府洋学研究と『ドン・キホーテ』』(2009年)を参照されたい。

『ドン・キホーテ』の翻訳であるとしていた『谷間乃鷺』が、前述のように同じ著者の『模範小説集』からの翻訳であったが、『谷間乃鷺』の前後には、他にも『模範小説集』からの翻訳があった。

- (1) 翻訳者不詳『欧州情史玉薔薇』九春堂。明治18年11月25日第96号から翌19年1月25日第102号まで7回連載。(著者はフランス人セルバント。『吾妻新誌』所載。総28頁。
- (2) 仏国セルバント氏著、『欧州情史美人の罫』、愛花仙史(閔)、中村柳塢(訳)東京共隆社、明治20年10月。127頁。

(1)の『玉薔薇』の第1回序文には「この情譜ハ。フランス国有名の小説より。訳出せるものにて。題して玉薔薇と云えるハ。篇中美人の行為によりて。訳者が仮に下し、名なれば。読む人間ハでも。巻中に顕る、美人の。善か悪かを。知るべし。原名ハ欺かれたる詐欺人と題したれど。あまりに俗なれば改めたり。」(『玉薔薇』第1回：1)と書かれている。セルバンテスの名前こそ見当たらないが、フランス人作家の小説であることは明記されている。(2)の『美人の罫』の序文を読むと、『谷間乃鷺』の評判が良かったので中村も訳してみようと思いついたことが書かれている。しかし『谷間乃鷺』程の出来ではなかった。また『美人の罫』の序文には、「『ドンキョット』中に録するもの」という説明こそないものの、序文や表紙には、やはり『谷間乃鷺』と同じく仏国セルバント氏著と明記され、また『谷間乃鷺』と同じ原著を用いたことも書かれている。ちなみに(1)『玉薔薇』も(2)『美人の罫』も、ともに『模範小説集』中の『い

つわりの結婚』の翻訳である。(1)は抄訳未完で、(2)は『谷間乃鷲』の場合と同じく、加筆されて2倍程度に話が長くなっており、さらにセルバンテスの原文にはないが、邦訳では内容が発端から大団円迄の10話に分けられている。『玉薔薇』、『谷間乃鷲』、『美人の罨』は、ともにフランス語からの翻訳で、作家はフランスの小説家で、名前もフランス語読みでセルバンテスではなくセルバントとなっている。また3作共通している内容から考えて、3作の関係者はともにこれらを「『ドンキーショット』中に録するもの」と考えていた、と見てよかろう。私はこれらを明治翻案3部作と呼んでいるが、その仕掛け人は、もちろん最初に『玉薔薇』が訳載された『吾妻新誌』の主筆であり、また『谷間乃鷲』と『美人の罨』の校閲者でもあった三木愛花である。

では実際に、『ドン・キホーテ』が最初に翻訳されたのがいつなのかというと、明治20年4月の『谷間乃鷲』と、同年10月に出た『美人の罨』の間、7月から9月にかけて青少年向けの『教育雑誌』に連載された『鈍喜翁奇行伝』（連載8回）が最初である。セルバンテスの前編第20章迄を、第1回から第5回に分けて翻訳している。ただし第3回以降は上下に分けて訳載された。しかし未完に終わっている。訳者はワ.シ.訳編と書かれているので、主筆の渡辺修二郎（国会図書館著者名典拠録の表記に従う。また本名は修次郎とある。）であろう。尚渡辺が使用した英訳は、平成4年(1992)に挿絵も同一であることなどからロンドンのRoutledge版（蔵本(7)：312）であること指摘した。

DON QUIJOTE : London, George Routledge & Sons, nd. (Routledge's Sixpenny Series No20) With 30 Illustrations by Sir J. Gilbert, R. A., Tony Johannot, and others

青少年向けに紹介するのであれば、わざわざ完訳本を用いてそれを抄訳する労を取らず、初めから青少年向けの翻訳書（抄訳）を用いて翻訳する方が得策であり理に適っている。この英訳書の巻末広告には「ROUTLEDGE'S ILLUSTRATED SIXPENNY SERIES...Under the above title, MESSRS. GEORGE ROUTLEDGE & SONS are issuing a Series of the CHEAPEST STANDARD BOOKS FOR YOUTH ever published in this or in any other country. Each book contains about 80 large pages, in three columns, brevier type, with about 80 illustrations...」とある。なお挿絵は『ドン・キホーテ』の場合、版によって30枚、40枚、50枚といろいろである。上記の英訳書には出版年や翻訳者が書かれていないが、たとえばTHE BRITISH LIBRARYのカatalogを検索すると、邦訳出版年の1887年に近いRoutledge版に1882年があり、そこには「Author: John Gilbert sir, 1817-1897」と書かれている。

ところで平成17年(2005)、斎藤は邦訳者である渡辺が、「英語もずいぶんできたのであるから、いくつかの英訳を参照しながら自ら要約し訳したとしてもおかしくわない」（斎藤：134）として、邦訳に際して用いた英訳書を「完訳版を参照した可能性が高い」（同）とした。そしてそう「推理するひとつの根拠がある。挿絵である」（同）、と1842年、1853年、刊行年不詳の3

冊を挙げている。また斎藤は渡辺の邦訳を「禁欲的な翻訳」、「翻訳の禁欲主義」と書いている。斎藤の言う「禁欲的な翻訳」とは何か。それは邦訳者である渡辺が行ったいくつもの要約や改訳を指している。なぜ渡辺が要約や改訳を行ったのかについて斎藤は、「掲載媒体が若い人たちを対象にした啓蒙的教育雑誌である、ということが強く意識され、訳者自ら検閲をかけてしまった」(同) ことにその原因があると言い、その結果「原作のドン・キホーテとサンチョの面白おかしい冒険に深みと味わいを添える男女間の悲恋物語、もしくは逆に笑いを引き起こす色恋沙汰が徹底的に排除された」(同：122)、「西欧の恋愛というものは明治の日本人にとって新しい概念であり、キリストの愛、隣人愛につながる西洋の男女の恋愛は(中略)渡辺には(中略)理解しがたいものだったにちがいない」(同：134-137)、「儒教道德の観点からは容認しがたい(中略)きわどいやりとりなどは、『惰落の醜態』で不必要な個所であり(中略)渡辺の言葉を使えば、『此書を読むのみにては解し難く、且つ読者の厭倦を来すべく、假令ひ厭倦を忍んで之を解するも益なき者は已むを得ず割愛せり』もしくは書き換えた(中略)彼の学問的姿勢から考えて、改訳することに躊躇はなかった」(同：137-138)のだ、と斎藤はその渡辺の「きわめて禁欲的な翻訳」のほどを説明している。果たしてそうなのか。私が指摘したRoutledge版を、斎藤は調べた形跡がないようなので以下簡単に触れておく。

邦訳と斎藤の指摘する英語完訳本(以下斎藤本と略する。)、そして私が指摘したRoutledge版の3書を比較してみると、邦訳と斎藤本とでは起こりえないような数々の一致する点、邦訳とRoutledge版では見られる。以下それを示すと、(1)邦訳は第5回で訳載を終了したが、第5回まででセルバンテスの第20章までを抄訳した。Routledge版も同じく第5章まででセルバンテスの第20章までを抄訳している。(2)邦訳の各回とRoutledge版の各章とで、その各回・各章の内容および表題が一致している。(3)さらに邦訳の各回とRoutledge版各章内の段落に番号を付してみると、邦訳の各回とRoutledge版の各章内の各段落番号が一致し、その段落内の内容もまた一致する。ただし邦訳第1回は最初の掲載ということもあり、邦訳者はくつかの段落をまとめて抄訳した箇所があるため、Routledge版と段落番号が一致しない箇所もあるが、段落内容は一致する。ただし邦訳者はこの抄訳のやり方では時間ばかりがかかり懲りたのか、その後はRoutledge版の各段落ごとに抄訳している。その方が時間の節約にもなり、賢明だと悟ったのであろう。(4)邦訳の省略、未訳、抄訳、改訳された箇所や内容は、そのすべてでRoutledge版との一致が見られる。つまりこれらの一致する内容から判断すれば、渡辺の翻訳は、英語抄訳であるRoutledge版を、さらに抄訳し直したものと考えられる。斎藤が指摘した「禁欲的な翻訳」、「翻訳の禁欲主義」に該当する渡辺の改訳・要約箇所を、逐一詳細に検証するまでもない。それは渡辺がRoutledge版を踏襲したに過ぎず、もしも邦訳時に未訳その他が生じたとしてもそれは已むを得ず抄訳時に起こったことであり、またもし邦訳に誤りがあるとすれば、それこそ邦訳者の判断による誤りとなろう。斎藤の指摘する改訳・要約箇所は、Routledge版との比較で明白である。

2 会社

島田謹二は17世紀「台湾の北部がエスパニア（スペイン）領、南部がオランダ領」（島田：112）となっていたころ、「当時の冒険家、航海家の何人かが、その軍船に16世紀の最流行物語『アマデイス・デ・ガウラ』を載せていたことについては、いろいろな文献に確証があるから、アマデイスの物語は、かつて台湾の一角で読まれたに違いない。（中略）当時のエスパニア文学は、国運の隆盛相まって、もっとも重んじられ、全欧各国を風靡していたから、どんなに実利功利に眼が眩んでいたとはいえ、冒険家、植民者の頭領格の中には、当代第一流の教養を受けたものが少なくなかったしするから、あるいは有名な伝フェルナンド・デ・ローハスの『セレスティナ』や、ローペ・デ・ベーガのコメディアス、カルデロン・デ・ラ・バルカのアウトスなども舶載されて来て、あるいは淡水^{タムスイ}の河口で、あるいは鷄籠^{キーロン}の砲臺で、明月に対しながら、朗唱・微吟されたかもしれぬ。それにまた当時は、ゴンゴラー派の神秘的な「幽玄体」が一代を風靡していたことから推していくと、あるいはこの絶東の一孤島にもゴンゴリスモの佶屈体をつくる小詩人がいたかもしれぬ。まして珠玉の小曲を残したロペス・デ・メンドーサ、艶麗な名作の多いガルシラーソ・デ・ラ・ベーガなど、前代の詩匠の作品は当然読まれた」（同：113）、とスペイン文学の作品や人名を挙げている。そこには『ドン・キホーテ』も含まれよう。日本では1624年にスペインが来航禁止、1639年にポルトガルが来航禁止、その後オランダとの貿易のみとなるが、日本にも伝わっていたのであろうか。ちなみに島田は「『ドン・キホーテ』は、あれほどの傑作でありながら（中略）結局、オランダ人」（同）の好みではなかったと書いている。

では明らかに活字となっている日本で最初の『ドン・キホーテ』の紹介はというと、古賀謹一郎訳編『度日閑言』である。謹一郎は通称で、名は増、字は如川、号は茶溪といい、洋学に関心を持ち外交にも関与し、「アメリカ使節のペリーの浦賀来航に際しては、或いは答書の起草に、或いは直接折衝に当たり、画策が大であった」（朝倉：165）ので安政2年（1855）洋学所頭取（所長）となり洋学の興隆に努め、そして文久2年（1862）には昌平黌学事ともなった幕末から明治前期にかけての儒学者、洋学者であった。『度日閑言』は、閑に任せて西洋の文物、文学、文化関係の事柄をオランダ語の書物、百科全書、雑誌から漢文に翻訳したものである。比較的多く翻訳されているのはスペインとオランダであった。これは慶応3年（1867）に完成し、全25巻である。残念ながら出版されず、現在自筆の原稿が国立国会図書館に所蔵されている。セルバンテスについては、第二四巻「争生地」（1841年訳出）で、「ドン・キューコッテ編を著した有名文章家、其才思、実に西班^(sic)の面目を施し、且つ文明世界の娯楽たり」（柳田：19）、と作者セルバンテスの伝記を詳しく紹介した。日本で最初にセルバンテスの伝記を紹介したのは古賀である。

次は文久2年（1862）に出版された日本初の本格的な英和辞書、堀達之助訳編『英和对訳袖珍

辞書』での見出し語である。

Quixotism 法外、無作法 (杉本：908)

堀は安政2(1855)年、外国文書を独断で処理したため5年間入獄することになったが、蕃書調所の頭取古賀謹一郎に救われ、洋書調所教授方となった後、上記の英和辞書を完成した。その後は蕃書調所翻訳方、辞書編纂主任、新聞翻訳、開成所教授職を歴任している。江戸幕府における洋学研究機関の変遷は以下のとおりである。

天文方(神田。1684年)→和蘭書籍和解御用(蛮書和解御用・翻訳局)(浅草。1811年)→洋学所(神田。1855年)→蕃書調所(1856年)→洋書調所(1852年)→開成所(1863年)

初期の『ドン・キホーテ』の紹介で忘れてならない人物がもう一人いる、中村敬字である。敬字は号で、通称は敬輔、諱は正直である。中村は漢学者であり洋学者でもあった。文久2年(1862)儒者となった後、慶応2年(1866)に幕府からのイギリス留学生12名の監督となって渡欧した。後に蘭学より英学に転向し英国ロンドン滞在1年余、幕府崩壊により明治元年に帰国後、徳川家に従って静岡に移り、静岡学問所一等教授となった。日本で最初に『ドン・キホーテ』を読んだことが明らかなのはこの人物である。中村はロンドン留学中に英訳『ドン・キホーテ』を購入している。書き込みなどからも読んだことは明らかで、さらに手書きのスペイン語単語帳も残っていることから、スペイン語を学習したこともわかっている。

Cervantes, Miguel de. (1866) *Adventures of Don Quixote de la Mancha*. Tr. Charles Jarvis, London, George Routledge and Sons.

中村は、明治3年(1870)、明治の大ベストセラーともなった『西国立志編』(サミュエル・スマイルズ著 Samuel Smiles)の翻訳者として夙に有名ではあるが、その姉妹編として明治11年(1878)に『西洋品行論』(同著者)を翻訳した。『ドン・キホーテ』は『西洋品行論』で紹介されている。中村は『ドン・キホーテ』を、その書中『ドンクイッキソテ』と紹介し、これを「絶好の好書」であり「諧謔戯笑」の作であると紹介しているが、『ドン・キホーテ』の笑いやユーモアについて最初に言及したのは中村であった。ところが私はその翻訳を読んで、不思議に違和感を感じた箇所があった。下線は筆者が施したものである。

好書ハ絶好ノ会社ナリ絶好ノ書ハ、読者ヲシテ絶好ノ会社ニ入ラシム、古来斯世ニ生レシ極大ノ心思アル人ノ前ニ我ガ身ヲ坐セシムルモノハ書ナリ極大ノ心思ヨリ出ル言語ヲ聴キ

移入史初期の『ドン・キホーテ』をめぐる（蔵本）

行事ヲ賭之ト世ヲ同ウスルガ如キ想ヲ成シム吾人ハソノ極大ノ心思ヲ分享スル者トナルヲ得極大ノ心思ト同情相ヒ憐ムヲ得及ビ之ト喜樂ヲ共ニシ憂愁ヲ同ウスルヲ得古人絶大ノ心思ニテ閱歴經驗セシモノヲ吾ガ所有トナスヲ得（中村：第8編8）

人荷クモ読書ヲ能クスレバ極貧極卑ナリト雖ドモ絶大ノ精神智識アル人ノ会社ニ入ルヲ得ベシ少モ唐突無禮ナルコトナシ古人ノ中ニ入社シテソノ笑罵歌哭ヲ聴クコト豈ニ愉快ノ甚シキモノニアラズヤ人誰カ塞爾萬セルバンテスのノ小説ヲ読デ笑ヲ発セザル人アランヤ蓋シ大人ノ精神書中ニ香殮シタレバ、吾輩一タビ書ヲ開ケバ、ソノ喜樂憂愁福祥禍殃歴然トシテ呈露シ、後人ノ教訓トナリ観玩及ビ慰籍ノ益トナル（同：第10編6-7）

中村の訳文を読んでいて奇異に感じたのは、「会社」である。「好書ハ絶好ノ会社ナリ絶好ノ書ハ、読者ヲシテ絶好ノ会社ニ入ラシム」に出てくる「会社」とは、どういう意味なのか。また英語からの翻訳であるから「会社」とは company の邦訳になるのだろうかと考えた。そこで原作を調べてみた。すると company ではなく、society の邦訳であることが判明した。すると中村が「社会」と書いたものを、植字工が印刷時に「会社」と間違えてしまったのか。それとも明治の初期には society を「会社」と翻訳していたのか。それならば company はなんと翻訳していたのであろうか、不思議に思えてならず、明治初期のいくつかの辞書で society を検索してみた。

英和对訳袖珍辞書 文久2(1862)年(杉本：145、759)

company 交親、社中、兵士、軍兵、一組、職人の仲間

society 仲ケ間交り、一致

英和字彙 明治6(1873)年(柴田：177、1081)

company 群、隊、聚会、会社、船伴、小隊

society 会、会社、連衆、交際、合同、社友

哲学字彙 明治14(1881)年(柴田：85)

society 社会

辞書の検索により判明したことは、明治10年以降 society の邦訳が「社会」に落ち着いていくことだ。実は「会社」も「社会」も、「蘭学書翻訳に際して日本で造られた訳語といわれる。(中略)〔会社は最初〕仲間、結社の意味で用いられ、幕末・明治初期に society の訳語となる。しかし society の訳語としては『社会』が定着するに及び、『会社』は company の訳語として定着

(中略)、その時期は明治7(1874)年から10年」(『日本国語大辞典』:204) ごろであるとされている。敬字は『西国立志編』でも society に「会社」の訳語を使っている。坪内逍遙は『当世書生氣質』の中で、club に「クワイシャ」とルビをふっている。

3 名前

Don Quijote をドン・キホーテと呼ぶようになるには、どのような変遷があったのか。前述のように、最初の紹介となる古賀謹一郎訳編『度日閑言』(1841年訳出)ではドン・キューイコツテ、そして中村敬字訳編『西洋品行論』(1878年)ではドンクイッキソートであった。そして『西洋品行論』の翌年(1879年)に、中村が監督として引率したイギリス留学生12名の1人である菊池大麓が、「明治の文学論を考究する場合看過できない」(高市:405)とされる『修辞及華文』を出版した。これはチェンバー兄弟 Chambers's『百科全書』“Information for the people”の中の、“Rhetorics and Belles Lettres”を翻訳したものである。菊池は6歳で幕府の蕃書調所で英語を学び、11歳で留学生としてイギリスに渡った。また幕府崩壊後、明治3年(1870)2度目の留学では、ケンブリッジ大学で数学と物理学を修め、近代数学を初めて日本に紹介し、その後は東京帝国大学の教授、総長、京都帝国大学の総長や文部大臣などを歴任した人物である。明治期の『ドン・キホーテ』評で最初に humor という語が登場し、そして『ドン・キホーテ』の「笑い」を分類することを、初めて紹介したのが菊池大麓訳編『修辞及華文』であった。菊池は humor を「戯謔」、ludicrous を「滑稽」、wit を「譏刺」と翻訳し、「戯謔ハ又滑稽中ニ自ラ篤厚ノ意ヲ含ム者ニ係ル而シテ本色ノ滑稽ヨリモ稽適切ノ功ヲ収ムヘシトス顧フニドン、クイキソートハ世界中第一等ノ戯弄文字ノ大作ナル」(菊池:11)、とドン・クイキソートの表記を用いている。また先に述べた幕府旧蔵書では、ドンキショット。また『谷間乃鷺』ではドンキーショットであった。さらに辞典類を参照すると、たとえば明治12年(1879)の吉田五十穂(訳纂)『西洋人名字引』では「ドン・コーキゾート」、また明治26年(1893)の山田武太郎(美妙)『萬国人名辞書』では「どぬきほおて」と平仮名表記になっている。このように幕末から明治にかけてそれぞれの外国語から翻訳された邦訳名ドン・キホーテには、いくつもの異名があったことになる。それがドン・キホーテの表記に落ち着くためには、それなりに契機となる出来事が必要であった。それが森鷗外の始めた、邦訳名ドン・キホーテの発音論争である。

明治29年2月20日に、鈴木醇庵の「エスパニヤ文学の鼓吹」が雑誌『日本人』に掲載された。内容は歴史を交えたスペイン文学の紹介で、日本でも多くのスペイン文学を翻訳・紹介すべきだと結んだものである。文中、鈴木はセルバンテスをセルヴワンテス、ドン・キホーテをゾンキホテと表記し、またそれ以外にも、例えば Lope de Vega ロープゼヴェガや Calderón de la Barca カルゼロンヅラバルカなどの表記も見られる。これに誰よりも早く反応したのが森鷗外であった。

鷗外は、醇庵の間違いだらけの邦訳名の発音に対して、醇庵発表の翌月、雑誌『めざまし草』（明治29年3月号）に、「西班牙文学」と題する一文を発表し、「西班牙語を読むに英音を以てするも可なり、獨逸音を以てするも可なり。奈何といふにそは日常の談話の殆免れざる所にして、英人も獨逸人も皆 Don Quijote を読み、Mancha の公子が上をば、さまざまの聲にて語るべければなり。獨り醇庵はいづくの國にもなかるべき発音法を用ゐ、殆人をして其固有名の何物を指すかを知らざらしむ」（鷗外全集第23巻：386）と手厳しく咎めた。ところがこの鷗外の発音に対して異を唱えた人物がいた。それが上田柳村、即ち上田敏である。

柳村は鷗外が発表した翌月、明治29年4月10日雑誌『帝國文學』に、「西班牙通の好一對」を発表した。文中、柳村は醇庵に対し「『エスパニヤ文學の鼓吹』に至ては杜撰粗鹵實に言語に絶え、其列記せる固有名詞の発音殆ど正鵠を得たるものなし（中略）己が精通せざる外邦文學の紹介を企つる者須らく正確なる文學史に基き、叙述翻訳を以て原意を傷けざらむを努め、殊更に獨創の見識ある如き風を粧ふべからず、醇庵が鼓吹の如き大言壯語徒に人の視聽を動かさむとするものにして、所謂文學に忠なるものに非らず。」（上田「西班牙通の好一對」：112-113）と書き、鷗外には「森子に至ては当世第一の獨逸文學通を以て世に称せらる。柵草紙以來ギョオテ、シルレルを奨説するを久しけれど、水沫集十数種多くは重訳、『即興詩人』の如き亦此類なり。未だ獨逸文學の特色異彩を發揮して憾無しと謂ふ可からざるなり」（同）と言ひ、醇庵に誤りを説きながらも、鷗外自身が「誤読して自ら得たりとなすも頗る滑稽なりと謂ふ可し」（同：112）と付け加えた。そしてさらに「莊麗婉美なる嶺南西班牙の言語は、斯る文學通に依りて吾邦に輸入せらる可きものなるか」（同）と結んだ。この掲載文に気分を慨した鷗外は、同月25日の雑誌『めざまし草』に早速「西班牙音及古今無隻の西班牙通」を発表し、ここに本格的なドン・キホーテ発音論争が始まることになった。

鷗外の柳村への反論となった「西班牙音及古今無隻の西班牙通」では、柳村が指摘した発音に対して「可笑きは帝國文学記者の西班牙音にこそあれ。仮に獨逸音を取り来りて、西班牙音を表示せんか、a、o、uの前なるcに獨逸のgg即ち促りたるgの音あり、e、iの前なるquにも亦同じき音ある」（鷗外全集23巻：413）「Pに獨逸のbb即ち促りたるbの音あるも亦然り、（中略）翻ておもうに、西班牙語のcとquとを我國の力行の清音となし、西班牙のpを我國のは行の半濁音となせる帝國文学記者をば、古今無隻の西班牙通ともいふべきならむ」（同：414）と反駁した。

3人の邦訳名を次にまとめてみる。カッコ内の表記は筆者による。

Don Quijote （ドン・キホーテ）

醇庵 ゾンキホオテ

鷗外 ドン、ギホテ

柳村 ドン、キホオテ

Lope Felix de Vega Carpio (ロペ・フェリックス・デ・ベガ・カルピオ)

醇庵 ロオプゼヴェガ

鷗外 ロベ、フェリス、エガ、ガルピオ

柳村 ロベ、フェリス、デ、エガ、カルピオ

Pedro Calderón de la Barca (カルデロン・デ・ラ・バルカ)

醇庵 カルゼロンヅラバルカ

鷗外 ベドロ、ガルデロン、デ、ラ、バルガ

柳村 ベドロ、カルデロン、デ、ラ、バルカ

(表記は原文の儘とする。)

上記のように3人の表記を対照してみれば、既に鷗外の負けであるが。しかしこの時にはまだ、世論はどちらの味方に付いてよいものやら決めかねていた。ところで柳村は先の文で、あまりに満心して鷗外のドイツ語の発音にまで誤りを指摘したが、これは却って柳村の負けとなった。

次に5月10日、『帝國文學』に柳村が「西班牙音」を発表する。ここでは柳村はいくつかの文法書を列挙し、自分の述べる内容はそのにも書かれていることだと主張し、「若し予輩が上に列挙したる『オオソリチイ』をも非なりとする程の学説あれば幸に教へよ」(上田「西班牙音」: 107)と言い、また「外国語発音の事極めて些細なるが如くなれど、詩歌の聲調を味ひ文章の妙趣を賞するに當ては苟くもすべからざる要務なれば少しく辯を費し、所ありき。但し予輩は初め脱兎の如く後処女の如き快男児ならねばLa Pronunciacion de la consonantes^(sic)と単数複数の別をも辨せざる西班牙通と発音を論ずるを屑しとせざる者なり」(同: 108)、と鷗外の文法の誤りを指摘した。「単数複数の別をも辨せざる西班牙通」とは、鷗外が典拠として示したドイツ語文中のスペイン語で、子音字を意味する *consonantes* が複数形になっているにもかかわらず、定冠詞が複数形の *las* にならず単数形の *la* になっていることを指摘しているのである。しかし敏は、鷗外の *Pronunciacion* (正しくは *Pronunciación*) の間違いについては全く指摘せず、そのまま使っている。

これに対して鷗外は、5月25日『めさまし草』の「再び西班牙音に就いて」で、自分の説く発音の援用としていく人かの文法学者を列挙しつつ、特に自説はシルリングの文法書に依拠するものだとし、「獨逸音を操る語學者が獨逸人のために西班牙音を論じたる書に求むることの正当なるは論なかるべし。獨逸には西班牙文典の著多しと雖、今かの西班牙に客たること十五年なりし瑞西の人シルリングが著につきてこれを示さむ」(鷗外全集23巻: 436)、と正当性を説きあくまで自説を曲げなかった。なおシルリングの『スペイン語文法』では、柳村が指摘した子音に関して、定冠詞は複数形の *las* になっており、正しく *La pronunciación de las consonates*

と印刷されている。鷗外の転記間違いか、印刷時の間違いかもしれない。

J. Schilling : *Spanische Grammatik*. Mit Berücksichtigung des geselisch.& geschäftlichen Verkehrs. 2. Aufl, Leip, Gloeckner, 1884.

ところでなぜ鷗外はドイツ留学時代（1884-1888）、上記スペイン語の文法書を購入したのか。実は鷗外にとっては、忘れられないドイツ留学時代のスペイン語との出会いがあったからで、その出会いがあったからこそ、鷗外は頑なにまで、自説を曲げようとはしなかったのかもしれない。

鷗外はドイツのドレスデン滞在中（明治18年）、ザクセン軍団長軍医監ロオト Wilhem Roth を始め、多くの軍医と交流を持った。その中の1人にヴィルケ Wilke がいる。鷗外は彼に就いて、「三等軍医にて衛生司令部 Sanitaets-Direction に奉職す。美貌の才子なり佛蘭西、西班牙二國の語に通ず。近ろまた英語を學べり。性毫も邊幅を修めず。余甚だ之を愛す。」（全集35巻：115）と書いている。また明治18年11月24日の鷗外の日記には、「始て雪ふる。医師キルケ Wilke に就いて西班牙語を學ぶこと此日より始まる。」（同：117）と記し、翌19年1月4日の日記には、「軍医監ロオトの需に應し、一週五時間日本語を教授す。教授はロオトの家に於てす。之に與る者 マイエル A. B. Meyer.、キルケ Georg Wilke 及 ロオトなり」（同：124）、とお礼として日本語を教えることにしたことが書かれている。

しかしなぜ鷗外はスペイン語を習ってみようと思ったのか。ライプチヒの夏期休暇（明治18年）の折から独訳でスペイン文学を読み始めたこともあり、これをスペイン語で読んでみようと思いついたからであろうか。それともこの頃親しく交わった友人の1人に、スペイン語を母国語とする南アメリカ出身のペーニャ・イ・フェルナンデス Peña y Fernández がいたからであろうか。とにかく鷗外は陸軍軍医として「大学に於いては医学部に籍を置いて生理学・細菌学・公衆衛生学等の實驗的研究に専念」（小堀：3）し、一方では「専門の自然科学書や教養としての哲学・歴史の書を播いた、その分量も相当のものであったが、その他に自己の好みに応じた文芸の書物の方も、楽しみとしてといふよりもむしろ努めて自分に課した研究課題でもあるかの様に、驚くべき分量の作品を熱心に精密に読みぬいた」（同）のである。そして勿論その中にスペイン文学書も含まれる。それらは現在鷗外旧蔵の洋書として、東京大学総合図書館に所蔵されている。もちろん独訳ではあるが『ドン・キホーテ』や、日本で最初のスペイン演劇の邦訳となり、そして鷗外の帰国後の文筆活動最初ともなった、カルデロン作『サラメアの村長』（明治22年）を始めとして、10数冊が残されている。スペイン文学を読み、スペイン語を学び、そしてスペイン語を母国語とする友人を持った鷗外は、さらにドレスデン滞在中に、この友人とザクセン王宮の近くの、スペイン人父娘の経営する「塔北那（タベルナ）」という酒店に何度も通ったと語っている。そしてここでの経験が帰国後『サラメアの村長』（明治22年）を

翻訳させるきっかけともなった。邦訳名は前述の通り『音調高洋箏一曲』（しらべはたかしギターのとふし）である。留学中のこんな経験や翻訳経験が、鷗外にとってはスペイン語への愛着となり自信ともなっていたのだ。

さて鷗外が発音論争で引用したスペイン語の文法書に話題を戻すと、これをヴィルケに西班牙語を習う以前ではないとしているので、習い始めた後か、ミュンヘン時代に、『スペイン文学読本』を購入した折に一緒に買い求めたものと考えられる。この文法書は第32課迄あり、論争になっている発音の説明は、第1課（1頁から5頁）で解説されている。しかしこの箇所には何等の書き込みもないが、これからあと第10課迄には鷗外の手書きになる多くの書き込みがあり勉強したことが窺われる。しかし第11課以降は全く書き込みはなく、おそらくは読まれることはなかったと考えられる。書き込みがなくなっているのは、スペイン語直説法現在形の不規則動詞（語幹母音変化動詞）のあたりである。

ところで鷗外が書いた「再び西班牙音に就いて」では、柳村の求めに応じて文法学者の名を列举し、かつシルリングの文を引用したが、それは鷗外が当初から援用し述べてきた典拠を独文にて示したに過ぎないものであった。そこで柳村は、6月10日『帝國文學』に「語學の研究」と「再び西班牙音を説く」を書き、柳村も多くの文法書を列举して鷗外の誤っていることを指摘するとともに、「一步を譲りて帰休庵（鷗外）が吾等に教へたる獨逸の西班牙文典に就て証拠を引用し來るも可なり」（上田「再び西班牙音を説く」：112）としながらも、「要之に帰休庵は瑞西の人とかいふシルリングの爲に誤られるものか。吾等は是に於て益々書の擇ぶ可きを覚えぬ。（中略）この莊重婉美雄渾優雅を兼ね備へたる西班牙語^(sic)を理解する内外の人士蓋しさまざまに乏からざるべければ、此問題を判断し得る読者は既に帰休庵と吾等と何れか當れるを熟知せらるべし。たゞ帰休庵は文界の一勢力なりと聞きしまゝ、嘗て其シルリングに誤られしが如く後學を誤らむことを恐れて、少しく匡せる所ありき。吾等素より辨を好まず、而も過を遂げしむるを欲せざるなり」（同：113）と書いた。

続く6月15日には、『早稲田文學』が「鷗外対諸新聞雑誌」を掲載し、ここに到って、この論争は明確に勝敗が見えてきた。その後6月30日に鷗外の最後の文「三たび西班牙音に就いて」が『めさまし草』に掲載される。鷗外はこの文で、柳村の「シルリングによって誤まれり」とする記述に対して、「獨逸人の近時西班牙語を習ふものは、多くシルリングが着實なる文典に拠る」（鷗外全集23巻：454）と言い、また自身は文法書だけに拠ったのではなく、ドイツ留学の折に実際に耳にしたスペイン語の発音をもとにして書いているのだとし、それゆえこれから以降も自説を変えるつもりはないと書いた。そして最後に「或るひとは早く既に西班牙音の事わが敗に帰したりといふ。帝國文學は今凱歌を奏して筆を擱くと雖、可ならむ」（同：455）と書き、これ以上の議論を無用とした。

しかし7月10日に柳村は、最後の文章「三たび西班牙音を説く」を『帝國文學』に発表した。ここで柳村は、「帰休庵が西班牙音の説も號を追ひて論辯の法を異にするこそ可笑しけれ（中

略) 吾等婦休庵の求に応じて、根拠とする所の明文を示し婦休庵が教へし文典中ロオトエル、モンタニヤの著よりも証左を引きて、婦休庵の誤れるを正し置きたり」(上田「三たび西班牙音を説く」:108)と書き、「大著中に名を列ねたる幾多の羅曼語學者の所説を粗なりとして、一シルリングの零碎たる通俗文典を精なりとするは、現今の文献學、言語學、音韻學等の、根底より破壊せられたる日に於てのみ僅に公言し得らるべき言葉なる可し」(同)、「謂へらく西班牙音を知らざる人と雖も、此論の正否を判断し得べき充分のDataは既に具れりと。婦休庵の之に對する今回の辯護は一変してまた一段の興味を添ふ。(中略)漸次範圍の狭まりゆく婦休庵の所説も蓋しこれを以て極とすべきか」(同)と書いた。

これ以上の議論を無用とした鷗外も、柳村の文に黙っているわけにもいかず、最後迄自身の説が正しいのだと押し通そうと、次の反駁する文「発音法余論」を書いて論争をさらに続けようと考えた。しかし次第に不利になって行き、遂には各新聞、雑誌も柳村との発音論争においては、鷗外の負けであると報じるようになってきては、さすがの鷗外も思うところがあったのだろう。だから用意をした「発音法余論」は未発表の原稿となってしまった。そしてこの辺りで醇庵に始まった発音論争も、幕を閉じることになる。しかしこの論争が、Don Quijoteがドン・キホーテという邦訳名に落ち着き、定着の兆しを見せ始める一つの契機となっているし、また小説『ドン・キホーテ』の名を広く一般に周知させるのにも、大いに役立ったことは確かである。

引用文献：(引用順)

1.
 - (1) 仏国セルバント氏著、『欧州新話谷間乃鷲』、愛花仙史（閲）、斎藤良恭（訳）、東京共隆社、明治20（1887）年4月。
 - (2) Leopoldo Rius (1970) *Bibliografía crítica de las obras de Miguel de Cervantes Saavedra*, Burt Franklin, New York.
 - (3) 青田寿美（2006）「解題」国文学研究資料館（リプリント日本近代文学76『欧州新話谷間乃鷲』）
 - (4) フランス語フランス文学会（1974）『フランス文学辞典』白水社
 - (5) 蔵本邦夫（2009）「幕府洋学研究と『ドン・キホーテ』」行路社（京都セルバンテス懇話会編『イスパニア図書』第12号）。
 - (6) 『欧州情史玉薔薇』、九春堂。（『吾妻新誌』明治18年11月25日第96号（第1回）から翌19年1月25日第102号まで第7回連載）
 - (7) 蔵本邦夫（1992）「日本における偽『ドン・キホーテ』考」（『サピエンチア英知大学論叢』第26号）
 - (8) Cervantes, Miguel de. (n.d.) *DON QUIJOTE*, George Routledge & Sons, London. (Routledge's Sixpenny Series No20) With 30 Illustrations by Sir J. Gilbert, R. A., Tony Johannot, and others.
 - (9) 斎藤文子（2005）『『ドン・キホーテ』最初の翻訳「鈍喜翁奇行伝」』、行路社（京都外国語大学イスパニア学科編『『ドン・キホーテ』を読む』）
2.
 - (10) 島田謹二（1976）『日本における外国文学（下巻）』朝日新聞社
 - (11) 朝倉治彦（他編）（1996）『江戸文人辞典』東京堂

- (12) 柳田泉 (1974) 『西洋文学の移入』 春秋社
- (13) 杉本つとむ編 (1981) 『江戸時代翻訳日本語辞典』 早稲田大学出版部
- (14) スマイルズ (著) 中村敬宇 (訳) (1878) 『西洋品行論』 中村正直
- (15) 柴田昌吉 (他編) 『英和字彙』 図書刊行会
- (16) 日本国語大辞典第2版編集委員会 (編) (2001) 『日本国語大辞典』 (第2版第3巻) 小学館
- 3.
- (17) 高市慶雄 (1928) 「解題」 日本評論社 (『明治文化全集』 第12巻)
- (18) チェンバー兄弟 (著) 菊池大麓 (訳) (1975) 「修辞及華文」 筑摩書房 (『明治文学全集』 79)
- (19) 森鷗外 (1973) 「西班牙文学」 岩波書店 (『鷗外全集第23巻』)
- (20) 森鷗外 (1975) 「獨逸日記」 岩波書店 (『鷗外全集第35巻』)
- (21) 上田柳村 (1896) 「西班牙通の好一对」 (『帝國文學』 第2巻第4)
- (22) 上田柳村 (1896) 「西班牙音」 (『帝國文學』 第2巻第5)
- (23) 小堀桂一郎 (1982) 『森鷗外—文業解題 (創作篇)』 岩波書店
- (24) 上田柳村 (1896) 「再び西班牙音と説く」 (『帝國文學』 第2巻第6)
- (25) 上田柳村 (1896) 「三たび西班牙音を説く」 (『帝國文學』 第2巻第7)